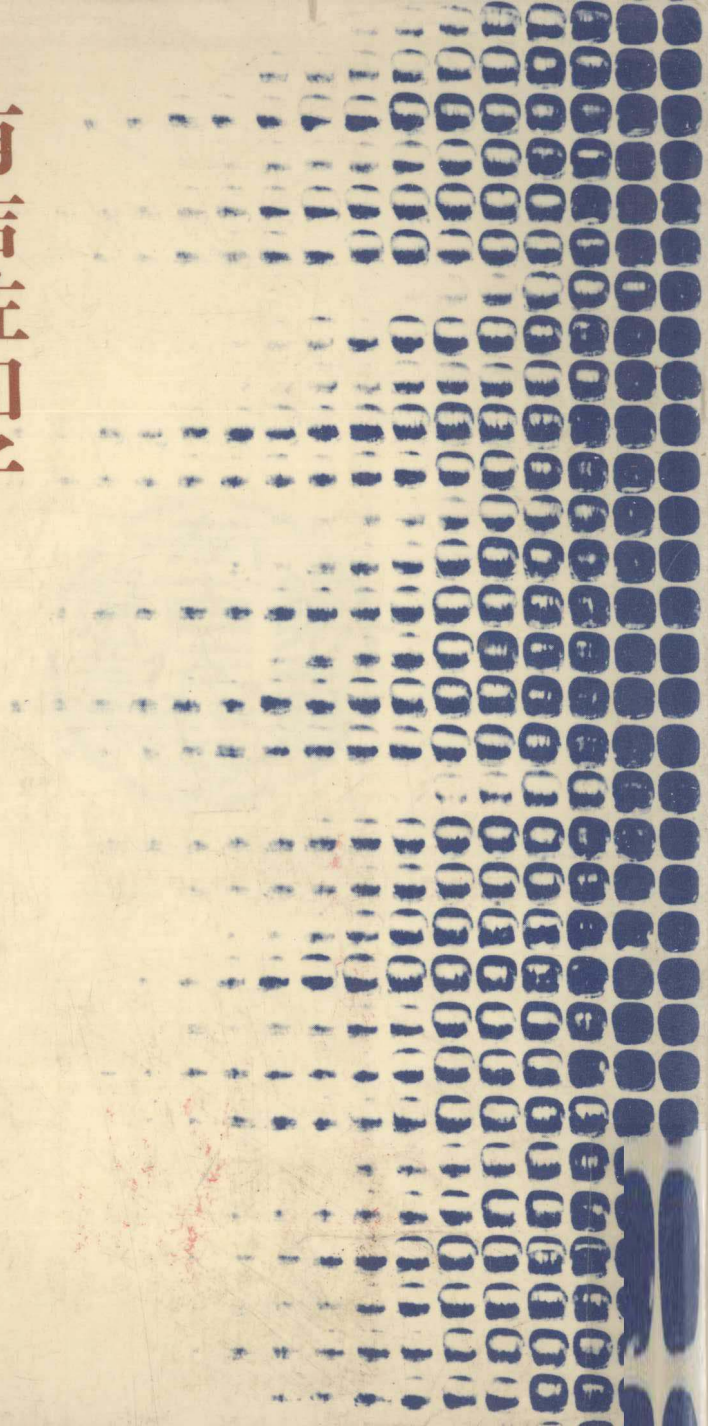
# 複合汚染

有吉佐和子



# 複合汚染

有吉佐和子

新潮社版

複合汚染（ふくごうおせん）
有吉佐和子選集（第二期）第十二巻
昭和五十三年二月二十日　印刷
昭和五十三年二月二十五日　発行
定価　一〇〇〇円
著者　有吉佐和子
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
〒162 東京都新宿区矢来町71
電話　業務部03（266）五一一一
編集部03（266）五四一一
振替東京四－八〇八番
印刷　凸版印刷株式会社
製本　株式会社大進堂

© by Sawako Ariyoshi, 1978, Printed in Japan
乱丁・落丁本は，御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

# 複合汚染

装帧 李禹焕

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

＊

いかにも初夏らしい爽やかな日が続いているのに、テレビの天気予報ではアナウンサーが今年の梅雨は長い見込みだと湿っぽい顔をして言っていた。ぼんやりブラウン管を眺めていた私のすぐ傍で、電話のベルが鳴った。受話器をとると、

「市川です。あのねえ、困ったことになったんですよ。青ちゃんがヨーロッパに行くと言い出してねえ。紀平の応援を頼んでいたのに、それは青ちゃんもはっきり約束してくれてたんですがねえ」

市川房枝女史からは、このところ頻繁に電話がかかっているのだが、こんな切羽詰った調子で話が始まったことはなかった。青ちゃんというのは、青島幸男のことだろうと咄嗟に判断して、私は訊き返した。

「あのオ、どうしてヨーロッパへ行くんですか」

「よく分らないんですよ。昨日は一日かかって話したんですがねえ、どうしてもヨーロッパへ行くと言うんですよ。あなた、すみませんがねえ、なんとか青ちゃんを説得してくれませんか。紀平はねえ、まだ知名度が足りませんからねえ。お願いしますよ」

市川房枝という人は、無駄口というものを決して叩かない。いつでも電話には用件があり、用がすむとさっさと切ってしまう。このときも同じことだった。

私はお願いされた通り、早速「青ちゃんの説得工作」に当ることになった。まず電話帳をひろげ、青島さんの電話番号を探した。人差指の先で番号をなぞりながら、同じことを六年前にもしたのを思い出した。

恰度、六年前、それは青島幸男が参議院選挙に初出馬し、全国区二位で当選してから三日とたたない頃だったと思う。当時、参議院議員だった市川さんから電話がかかって、

「あのねえ、青島幸男って人に会いたいんですよ。あなた、会わせてくれませんか」

と、いきなり言われ、かしこまりましたと反射的に答え、電話が切れた後で私は茫然とした。私は青島さんに一面識もなかったのだ。どういうことから市川先生が、私と青島氏を知り合いだと考えたのか、いまだに訊いていないから私にも分らない。しかし、六年前も私は電話帳に飛びついて彼の家の電話番号を探し当て、ダイヤルをまわしたのだった。

呼出音が聞こえるとすぐ美しい女性の声が、

「青島でございます」

と言った。

「あのオ、有吉ですけれど」

「あら、お久しぶりでございます」

「まったく、お久しぶりですね。青島さんとお話したいんですけど、今どちらですか」

「家におります。少々お待ち下さい」

しばらくして、電話が切り替えられると同時に、凄いボリュームでロック・ミュージックが鳴り響いた。ああ、六年前と何もかも同じだ。

＊

「青島です」

「あのオ有吉ですけど、ちょっとお目にかかりたいの」
「いいですよ、久しぶりですね」
「今晩の御都合はいかが」
「いま客が来ていましてね」
「そのお客さんは何時までいらっしゃるの」
「そうですねえ、九時半、かな」
「じゃ九時半にお邪魔しますから」
少し押しの強い電話だったが、何しろ説得しに行くのだから私も勢込んでいたのだ。しかし、まったく青島さんはヨーロッパへ何をしに行くのだろう。選挙の公示まで後一週間だというのに。私には分らなかった。市川先生の慌てたような口調が耳の奥に甦ってくる。あのねえ、困ったことになったんですよ。
青島さんの家は、私のところからそう遠くなかった。車で二十分くらいで着いてしまう。しかし私は落着きを失って、一時間前には外出着に着替え、家の中でうろうろしていた。
六年前もこんな工合だった、と私は思い出していた。六年前、市川先生に頼まれて、青島さんに電話をし、彼は実に気軽く応じてくれて、あのときは三人で会食をした。芝の精進料理屋の一室で、青島さんは初対面の女二人を前にして、動物のセックスシーンばかり撮影するという彼の計画を熱心に話してくれた。私は呆気にとられ、市川先生はときどき頓珍漢な相槌を打ち、青島さんは朗らかに笑っていた。三人とも何を喋ってもちぐはぐな工合だったが、食事が終るときには、市川房枝の創立した参議院二院クラブに青島さんは参加することに決った。政党無所属の人人の集りだった緑風会が消えたところで、参議院本来の第二院としての在り方を示すものとして、青島さんも立候補したときから当選したら入ろうと思っていた様子だった。

それから今日まで、私は一度も青島さんに会っていない。私はテレビにはあまり出演しない方針できているし、私の行くような会合には青島さんが顔を出さない。青島幸男の二院クラブ入りに私が何か関係したという話など、だから三人以外は誰も知らない筈だった。

青島さんの住居は、彼が立候補直前に入った中野のマンションである。私の友人が同じところに住んでいるのだが、そこの出入りでも私は彼と顔を合わしたことがなかった。

ドアが向うから先に開いて、美しい奥さんが顔を出した。

「いらっしゃいませ」

よく考えてみると、私たちは初対面なのだった。電話で口をきいたことがあり、どちらも写真を見たことがあったので、そうは思わなかったのだけれど。

「少し早く伺いすぎましたね」

「大丈夫です。こちらでお待ち下さい」

青島夫人からお茶を頂いて、不思議な気がした。選挙の直前だというのに、この家には緊張した雰囲気がまるでない。

＊

時間きっちりに青島さんよりちょっとばかりハンサムな秘書が、

「どうぞ」

と迎えに来てくれた。住居の隣が事務所兼仕事部屋になっていて、青島さんが扉を開けて廊下に立っていた。

「やあ、いらっしゃい」

「晩く、すみません」

「いいですよ、久しぶりですね」

「六年ぶりなのよ」
「ああ、もう、そうなるなあ」
事務所兼仕事部屋の有様は、洋間と日本間と寝室の四畳半ぐらいのものが小さくまとまって、片隅がスタンドバアみたいになっている。耳がどうかなりそうなロック。今までのお客も、この音楽の中に浸っていたのかしらん。青島さんと秘書氏は室内の照明を明るくしたり暗くしたり、なかなか二人の意見が一致しない。私は黙ってスタンドの椅子に腰をおろしていた。
「ヨーロッパへいくんですって」
「うん、それが一番いいんじゃないかと考えたわけなんだ」
「そのことで私は伺ったのよ」
「だと思ってましたよ、昨日は市川先生にこってり絞られたからなあ」
青島さんは甘い甘いリキュールを私に注いでくれたが、私は甘いものは苦手なのでちょっと困っていた。それに音楽のボリュームが大きすぎる。
青島さんが、すっと左手を伸したと思うと、ロックが止った。
「あの方の知名度が足りないから、先生は心配なのよ」
「それはきっと心配でしょう」
ひとごとのように言うじゃないかと私は少し咎めたくなった。
「でもあなた、応援をするって、約束してたんじゃなかったの」
「約束はしてましたよ、しかしそれは市川先生が立候補する前の話だ」
私は心の中で、あっと叫んでいた。
市川房枝の立候補は、まったく突然の出来事だった。選挙公示の二週間前。私も寝耳に水だったが、青島さんが知ったのは新聞に出る一日前で、彼も驚かされた一人だったのだ。

「紀平さんの応援を約束通り僕がするとして、いいですか。紀平さんの後に僕と先生が並んでサ、東京地方区は紀平悌子をどうぞ、全国区は市川か青島か、二人のうち一人をどうぞって言うの？変じゃないですか」

私は一言もなかった。それどころか青島さんがヨーロッパへ出かけて行く謎が氷解していた。市川と青島。票田はぶつからないだろうとは思っても、二人とも同じ全国区だ。青島さんはテレビ界同業の人々の間でごく評判がいい。その特徴は、争いをよけて通る。揉めごとは手前で納めてしまうというタイプなのである。私は感動していた。

＊

青島幸男は口に出さないが、彼にヨーロッパ行きの決心をさせたのは他ならぬ市川房枝の立候補だったのだ、と私は悟った。

三年前に市川房枝は東京地方区で落選していた。テレビで女性ファンの多かったアナウンサー出身の候補者が、婦人票をごっそり集めて当選してしまい、市川房枝の五十年にわたるキャリアが惨敗した。あのときはショックだった。推薦人に名を貸したきりで、実際には一票を投じただけでノホホンとしていた私は、大地震に出遭ったように驚いた。

テレビ評論家が、東京の恥だと言って嘆いていたのが忘れられない。全国区に出るべきだったと人々は愚痴をこぼし、五十五万票という得票数は決して少くないのにと言いつのった。しかし、あのときは次点でさえなかったのだ。

その後、私も市川先生に会うと全国区で立候補することをすすめていたし、多くの人々が同じ考えでいたのに、先生は後継者も出来ていることだし、自分はもう引退すると言いはって譲らなかった。

「市川先生も困った人よね。あれだけ出ないと言いはっていて、土壇場ででしょ。私も実は大い

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

に困っているところなのよ」
「どうして。どうして有吉佐和子が困るんですか、市川房枝の立候補で」
彼のヨーロッパ行きを説得する目的で出かけて来たにもかかわらず、私はだらしなく自分の愚痴をこぼす羽目になった。
「秋から朝日新聞の連載小説が始まることになっているのよ、もう何年も前からの約束なの」
「そうですか、期待してます」
「それが番狂わせになっちゃったのよ。というのは、婦人運動を経糸にして書くつもりだったのね。女が選挙権を持っていなかった頃のことをもう一度ふり返ってみたいと思って」
「結構ですね。本当にふり返って頂きたいですよ、僕は」
「市川房枝が実名で出てくるのよ」
「いいじゃないですか」
「よく有りませんよ。私は先生に本当に引退する気かと念を押してから、準備していたのよ。それなのに立候補でしょう？　私は推薦人ですよ。公示の日には応援演説をすることになっているのよ。世間は大騒ぎをしているというのに、これで先生が当選したら、私の小説は書けなくなってしまう」
「関係ないよ。書くべきだ」
「そうはいきませんよ。変ですよ。もしも、よ。もしも高位で当選したら、私は太鼓叩いた上に提灯まで持つような工合じゃない。出来ることじゃありませんよ」
「そうかなあ」

＊

横で秘書氏が私に肯いて、それはやっぱりまずいでしょうねえと言ってくれた。部屋の中は三

人きりだった。
「いや、書けるよ、有吉さん。小説なんだから、市川房枝の死ぬところを書いたらいい」
「え？」
「参議院本会議の表決でさア、市川房枝が白札握ってすっくと立ち、一歩一歩壇上へ上って行く。僕は先生の一つ前だから、いつも振返り振返り歩くのよ。三年前まで、つい癖みたいになっていた。市川房枝が白札を入れた、そこで体が崩れる。僕は駈け戻って下から支えて叫ぶ。市川先生ッ」
「あなた、随分いい役ねえ」
「保革逆転の歴史的瞬間だからね。テレビカメラは当然僕たちのズームアップだ。それから、どうしようかな」
「縁起でもないわ、やめてよ」
「どうして。政治家として最も素晴らしい死に方だと思うよ、僕も四十年先に、そういう死に方で幕にするかな」
　私は大声で叫んだ。
「死にませんよ、あのおばあさんは」
「うん、死なないねえ。あと十二年、僕は保証しますよ」
「十二年？」
「もう二期やるよ、おばあさんは。九十三か。多分最年長記録じゃないかな」
「御両親が揃って御長命だったし、お姉様が八十八で、先生と同じようにお元気ですって。そういう家系なのね」
　それから後はビールに変えてもらい、いかに市川房枝は丈夫で長生きするか、私たち三人は口

口に思いついたことを賑やかに喋りあった。
「当選は、するわよ、ね」
「確実でしょ。三年前も全国区で出とけばよかったんだよ。東京は四つの議席に五つの政党だろ。始めから無理だったんだ。僕は三年前に応援して、これで勝てるかって思ったもの。参議院は良識の府なんだから、声はり上げて頑張ってというスタイルの選挙は違うよね。良識ある人に投票するということで、おまかせした方が理想的でしょ」
「そうねえ」
肯きながらも、私は背筋がぞっとしていた。東京地方区。四つの議席に五つの政党。市川房枝でさえ落選したところへ、世間的にはほとんど無名の紀平悌子が立候補したのだ。頼みの綱にしていた青島幸男がヨーロッパへ行ってしまう。市川房枝がいくら丈夫でも、やっぱり八十一歳。無理はさせられない。
それじゃ、いったい、紀平悌子は、どうなるのだ。
「分ってくれましたか」
「ええ、まあ、ね」
「そこで気持よく僕をヨーロッパへ行かせて下さいよ」
青島さんはビールをぐいと飲み干し、にこにこしたが、私はあいまいな返事しかできなかった。

＊

翌日の新聞に「青島幸男は選挙中ヨーロッパで優雅に過す」という記事が、かなり派手に出た。先客はマスコミ関係の人たちだったのだろうと私は思った。時間的にみて、新聞記者でなく、週刊誌の取材だったのだろう。すると来週の週刊誌は一斉に「最後の大物」市川房枝の出馬と、青島幸男の「選挙ゼロ戦」を特集することになるだろう。どちらも二院クラブのメムバーだから、

効果を考えれば有りがたい。しかし、あの細かく気のつく青島さんが、何もせずにヨーロッパへ行くというのは、外から見れば悠々たるものだが、本人の本心はきっと苦しく落着かないのではないだろうかと私は察していた。

市川先生は、あんな電話をかけておきながら大した期待をしていなかったらしく、結果はどうだったかと訊いても来なかったし、私も報告する気になれなかった。青ちゃんのヨーロッパ行きは先生のせいですよとは、いくらなんでも言いにくい。新聞記事では青島は自信満々と書かれていたが、私は千番に一番のかね合いのようなものではないかと思った。こんなことをやった人はまだないのだから、当れば大量得票、しかし不真面目だという印象を与えたら結果のマイナスは大きいだろう。

市川房枝選挙対策本部と、紀平選挙対策事務所からは、交互によく電話がかかってくるようになった。市川選対からは夜中に、何字以内の推薦文を今晩中に書けと言ってきたり、公示から二十三日間の私のスケジュールの問合せやら、カムパについて考え方が選対の青年グループと私の間に行き違いがあったり、とにかく私は落着かなくなった。私は二十三日間は、全部あけておきますからと返事をし、慌ててつけ加えた。

「ただし、午前中は勘弁して下さいね。午後だけにして頂きたいんです。その代り、なんでもしますから」

「分りました。とりあえず数寄屋橋の選挙第一声につきあって頂きたいんですが。公示の日の午過ぎになると思います。時間は前日に御連絡します」

市川選対からの連絡は、例外なく若い男性の声であったが、紀平選対からかかる電話はいつでも女性である。

紀平さんとは一面識もなかったが、その存在については十年も前から私はよく知っていた。市

川先生との話の中によく出てきたからである。市川房枝の参議院在籍中に紀平さんを立候補させるべきだというのは、ごく常識的な考え方で、六年前には当然立候補するものと私は思っていたのが、どういう事情でか延びのびになっていた。

＊

作家は一般に夜ふかしだと思われているようだ。私も若い頃はそうだったが、一生小説を書くと心にきめてからは生活設計をがらりと変えてしまった。私は低血圧だけれど、書く仕事は午前中にしている。電話にも出ないし、家の者とも顔を合わせずに、朝食抜きで机に向う。といっても私は一年に小説一つか二つがせいぜいの寡作な仕事をしているから、七日も書けば一カ月分の仕事はできてしまう。後はひたすら本を読んでのらくら暮しているのだが、こういうところは他人には分らないだろう。

参議院選挙公示の日、私はいつもより三十分も早く目ざめ、「新潮」という文芸雑誌の連載「鬼怒川」を午前中で十枚書いた。時代は大正七、八年、舞台は関東地方の農家の話である。書きあげてから、この時代が市川房枝の夜明けだったのに気がついた。新婦人協会の設立と五条撤廃運動、いわゆる婦人選挙権獲得運動が華々しくスタートしたのが大正八年なのである。市川房枝の運動は、そろそろ六十年になるのかと、筆を措きながら私には感慨があった。

選挙の応援演説を、本気でするのはこれが初めてである。私は大正時代から立上って昭和四十九年に戻ると、洋服ダンスを開けて、吊してあるものの中からどれを着たらいいか迷った。まず選挙カーの上に登るのであろうから、ミニスカートは避けるべきだし、和服は当然不合格だ。選挙は闘いなのだから、パンタロンを選ぶのが常識だった。しかし私が立候補するわけではないので派手なものを着るわけにいかない。私は紺無地のパンタロンスーツをひっぱり出した。このときは、よもやこれを、ほとんど二十三日間着続けるとは思ってもいなかった。

本当に、私が頼まれていたのは第一声のつきあいだけであり、市川選対から何も言って来ない限り、それ以上のことをするつもりはこの日の朝でもまだなかった。

一時半。数寄屋橋。

前日、きちんと市川選対から電話連絡が入っていた。だが、私は時間というものにはまるで駄目なのだ。ルーズというのがあるが、私はその反対だ。だいたい一時半などという時間の約束ができると、もう昼食を家でとる余裕がなくなってしまう。

何も食べずに家を出て、地下鉄で銀座駅から数寄屋橋へ上って行くと、思いがけず石原慎太郎氏にばったり出会った。ダンディな背広姿だった。

「あら」

「やあ。懐しいねえ」

そこで少し立話をした。私は石原さんが自民党の応援に来ていることや、彼が誰に肩入れしているか知っていたので、ははあと思っていたが、石原さんは私が街頭演説することなど想像もできないようだった。

「ねえ君、野坂はいったいどういう気なんだろうね」

作家である野坂昭如氏が東京地方区に出馬したのも、この選挙では大きな話題だった。

＊

「そうねえ、かなり本気なんじゃない」

「とは思えないな。全国区ならともかく、東京で勝てるわけがない」

「うん、実は私もかなり迷惑に思っているの」

「君が？　どうして？」

「だって東京地方区には紀平悌子が出てますからね」



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c